

『教育思潮研究』第十四卷 青年学校における統合教育 一九四〇年七月

(東京帝国大学文学部教育学研究室教育思潮研究会／目黒書店)

職業科に於ける統合教育

矢口 新

此の論文の目的は青年学校の職業科に就て、統合教育の見地よりその現状を述べ、併せて統合教育に対する問題の所在を明かにせんとするものである。この材料となつたものは前掲飯島氏論文のそれと同じ調査である。従つて調査の趣旨及び方法等については同氏の論文を参照されたい。

我々の調査せる学校は総数二四二校であるが、これらの青年学校の職業科の内容は細かくみれば非常に種類が多く、一概に論ずることが出来ない。今考察の便宜上文部省の職業科教授及訓練要目に於ける職業科の分類に従つて大きく農業、水産、工業、商業に分けて論ずることとする。二四二校の職業科をこれによつて分類すると次の如くなる。その合計が全体の学校数より多いのは一学校に於て、二つ以上の職業科の課程を設けてあるものがあるからである。次にこの表の分類に従つてその概略を述べよう。

一、農業科

農業に就ては青年学校職業科教授及訓練要目によれば、普通科に於ては農業といふ一科目の下に全ての教材が排列され、本科に於ては教

農 業	水 産	商 業	工 業
八二	一五	六八	九九

材は学年別に排列されず、幾つかの部門に区分して重要な教材が示されてゐる。併しながら教材を部門に区分したのは便宜上であつて、実施の場合に當つてこれらの部門に分けられた教材を「別個に取扱ふことなく、其の連絡統合に力め、實際経営の指導に適合せしむべし」と注意されてゐる。これによれば文部省の要求するのは明かに統合教育である。

さてこれに対して農業科を置く青年学校に於ては如何なる教育を行つてゐるであらうか。主としてその学科編成の上から統合教育の現状を見てみよう。同じく農業科を置く青年学校の間にも種々な傾向が見られるが、まづ大きく二つの型に分類し得ると思はれる。即ち農業科といふ一科目のみを置いてゐるものと、農業科をいふ中に幾つかの科目を置いて、いはば農業教育を分科的取扱ひによつて行つてゐるものとである。調査の結果は前者に属するもの六〇校、後者に属するもの二二校であつた。調査の結果では農業科一科目を置いてゐるものが断然多いが、恐らくかういふ形のもの是一般にもかなり多いと思はれる。農業といふ一科目のみを置いてゐるといふ事は、その点だけからすればかなり統合的に教育を行つてゐると見てよい。しかし實際に如何に統合的教育を行つてゐるかといふ事は尚進んで研究を要することである。又二二校の分科的取扱ひをしてゐる学校があることも重要

な問題である。それらに就ては如何に学科編成をしてゐるか、又その理由、更に又分科的取扱をしてどの程度統合といふ事が考慮されてゐるかが考察されねばならぬ。

第一に一科目のみを置くものについて考察する。この方法をとるものは六〇校であるが、これには凡そ二つ型が見られる。即ち全然教科書を使用せず、実習を中心として教材をそれに統合させる方針をとるものである。此の場合必要に応じてプリントを作成して渡すとか、ノートをとらせるとか、又参考書を使用するといふことはある。かういふ形の統合教育を行つてゐるものが二七校である。これらの学校では実習が統合の中心となつてゐる。従つて季節によつて教材が変化し、その季節的題材を中心としてすべての教材を統合して行くといふ方法がとられてゐるものの如くである。

これに対して他の形は何等かの体系に基いて教材の排列がなされてゐる農業教科書を使用してゐるものである。この場合教科書に於て教材の統合が行はれてゐるわけである。故に教科書自体に種々な教材を統合する原理がある。使はれてゐる教科書を見るとその原理となつてゐるものは第一に郷土の農業形態である。殆んど全部の学校が県の教育会で編纂された教科書を使用してゐる。又この外に従来幾つかの部門に分れて取扱はれてゐた教材の連絡をはかるといふ程度でまとめた教科書を使用せるものがある。併しこの形の教科書を使つてゐる学校は余り多くない。

同じく一科目として農業科を置くものの中にも以上の二つの形が見られるが、此の両者はその実際の教授に於てかなり差があることと思はれる。前者に於ては統合が実習を中心として行はれてゐる為、教材も具体的に実生活に即して排列されその点では極めて有利である。しかしこの方法では季節的題材を中心とするため、ともすれば教育内

容が単純化し、又教材自身のもつ全体としての系統、組織を与えないふ点に欠くる憂なしとしない。この点については今後充分研究されねばならぬであらう。これに対して後者は前者の如き懸念はないにしても教科書自身のもつ理論的体系に従ふ結果その教育が具体的になく、実際生活とはかけ離れる恐れがあるのではないか。これらは更に今後の研究問題に属する。

第二に農業科の中を更に幾つかに分科してゐるものに就て考察しなければならぬ。調査によつてこの分科的方法をとる学校をみると、その教科の分科的取扱を全学年でなしてゐるものと一部の学年に於てなしてゐるものがある。前者一三校、後者九校であるが、この両者は統合教育に対してかなり異つた態度を示してゐると思はれるから別箇に論じよう。

まづ一部の学年に於て教科の分科的取扱ひをなし、その他の学年では農業一科目を置いて総合的に行つてゐるものについてその一般的傾向を述べよう。かかる方法をとるものは何れも本科の下級即ち一、二年の所で分科的取扱をしてゐる。尤も九校の中四校はこの分科的な学科編成をなす二年間の課程を特別な課程として設けてゐるのであつて、これ以外に一般のコースとして総合的に一科目として教授する課程を設けてゐるのである。併し何れにしても本科一、二年の所で分科的な学科編成を行つてゐるのである。この方法をとるものに於て著しい特徴は、下級の分科的取扱をなす各学年が夫々その一年間の教授総時間数に於て甚だしく膨れてゐることである。上級の所では一年間四、五十時間から九十時間位であるに對して、この下級の所では三百時間乃至四百時間にもなつてゐる。次に科目の置き方は大体何れも要目に示された農業の大きい十二の部門即ち作物、蔬菜、果樹、花卉、作物の保護、土壤、肥料、養蚕、畜産、農産加工、林業、農業経営等

の一部或は大部分を夫々科目として置くといふ方法をとつてゐる。唯一応注意すべきは、これらの科目を二年間に排列するに就ての方法である。各学年とも同じ科目を排列してゐるものと、一年と二年では全然別な科目を置いてゐるものとがある。前者では後者より多少各科目の間の連絡統合をはかるには便利ではないかと思はれる。而してその科目の教授には一般に教科書を使用するのが原則の様であつて、その教科書は農業学校のそれとして作られたものが多い。使用してゐるものの殆んど全部がそれであるといつてよい。以上が低学年に於て教科的分科的編成をなすものの概況であるが、これらの学年では大体に於て学科目の編成の点では統合といふ事は考へられてゐない様である。勿論多くの農村の青年学校の如く大抵一人の農業科の教員がその各科目を全部受け持つてゐるのであらうから、その間に多少の連絡は行はれるであらうが、見た所少くともその程度を出ないものの如くである。そこで問題となるのは三年以上に於て、或は他のコースに於ては一科目のみを置き総合的な取扱ひを実際に行つてゐながら、一、二年に於て何故特にかくの如き分科的な取扱ひによる教育をするかといふ事でなければならぬ。勿論学科の統合が、下級に於て行ひ難いといふのでない事は明かである。然らばその他に何等か学科の統合を否定する如き理由があるのであらうか。この問題に関してはさきに述べた本科一、二年の所で教授時間数が多いと云ふ事に注目する必要がある。即ち時間数が多いといふ事は教育内容を多くし得るといふ事であるが、この低学年の所で教育内容を多くしてこの期間に農業に関する大部分の知識技能を授けようとしてかくの如く時間数を多くしてゐるのではあるまいか。特別なコースを置くといふのもこの考へ方ではないかと思はれる。さうしてそこでは、いはば乙種農業学校程度の教育が目標とされ、従つてその科目の編成の仕方も直観的にさういふもの

を模倣するのではあるまいか。かうしてこの結果この低学年の所で分科的編成が出てゐるのであらう。しからば学年は低学年であるが、その目標はむしろ高い程度の内容を授けるといふ事にある。とすればこの所謂高い程度の内容を授ける場合に学科の統合は不適當であるかといふ問題が生ずる。分科的取扱ひをしなければ高い程度の内容を授けられないか。この問題はむしろ今後の研究問題に属することであつて、ここに示された限りでは何とも答へるべきがない。現在さういふ為に分科的取扱ひをしてゐる学校といへども、さういふ問題に対して研究の結果分科してゐるのではないのである。そもそも統合の方針による要目が発表されてまだ幾何の時日も経てゐないのであるから、この問題にはしばらく時日を以てしなければならぬ。

次に全学年に於て分科的方法をとつてゐる学校について考察しよう。その科目に就ては何等か特殊なものがあるであらうか。一三の学校をみると大体要目に於ける十二の大きい部門を夫々科目として置いてゐるものが多い。特に部門の名称にない科目としては二、三の学校に於て農業経済学、農業法規、農業調査、気象学、糖業等があるのみである。この科目はかなり専門的であつて程度が高いといふ事は考へられようが、しかしだからといつてこの僅かの科目の為に全体を特に分科的取扱ひをする必要があるとは思はれない。しかもかかる科目が見られるのは極く少数の学校に限られてゐるのである。従つて分科的編成をなすのはこれらの科目の為ではない。次にこの種の学校で著しい特徴は二、三を除いては皆各学年毎に異つた科目を置いてゐることである。例へば一年に作物、蔬菜、土壤を、二年に肥料、産業、三年に於て又別の科目といふが如きである。極く少数の学校で各学年殆んど同様な科目を置いてゐる。教授時間数は皆文部省の要求程度である。前述の低学年に於て分科的編成を行つてゐる場合の如く時間数の多

いものは全然ない。又その教科書には大抵農業学校用のそれとして作られたものを使用してゐる。

以上がその概況であるが、これによれば大体この形の学校に於ては統合の見地がないといふ事が言へよう。唯二、三各学年同一科目を置いて多少教科の統合に便宜な編成を計つてゐると思はれる学校がある程度である。その他では統合の観点とはかなり異つた見地で教育がなされてゐるものの如くである。併しながら同時に我々の見た限りでは分科的方法による学科編成を積極的に主張するものもない様である。従つてこの限りに於ては統合教育に封して何等問題を提出してゐないと言へよう。

二、水産科

水産科を設置してゐる青年学校に就ては、一五校の回答を得た。校数が余りに少く、ここにあらはれた傾向が一般的なものかどうか多少の疑もないではないが、ともかくこれだけの学校に就て簡単にその概況を述べて置かう。

ここでも一応要目を規準として各校の学科編成を見ることにする。水産科要目の方針は全く農業科のそれと同様である。即ち普通科に在つては基礎的な項目をこの水産科一科目の下に系統的に排列してゐる。本科に在つては教材の排列は行はず便宜上十部門に分かつて必要な教材を示してゐるが、実施要目作成の例にも明かな如くやはり水産科一科目として総合的に教育をなす方針である。

かういふ文部省の要求を一五校に於ては如何に実現してゐるであらうか。学科編成をみると一五校の中一校がその科目を水産科といふ一科目にしてゐる。従つてそれは統合教育をしてゐると考へられるが、それがどの程度のものかは調査結果に關する限り不明である。他

の四校は実習を学科と區別して設けてゐるものである。これは要目の要求する所とは異つてゐる。従つて学科のみは一科目として総合的であるが、前者より多少分科的であるといへよう。水産科に於ても統合教育がなされるならば、実習も当然学科の中に於て取扱はれなければならない事は言ふを俟たない。

三、商業科

商業科を置く学校は調査した学校中六八校である。次にこれらの学校に就て、その傾向を見て行かう。最初に注意して置かねばならぬことは、この六八の学校中には私立青年学校一三校を含んでゐることである。而して青年学校に於ける私立といふのは大多数が公立とは相当に異つた形態をもつてゐる。例へばここにあげた一三の青年学校中では百貨店の青年学校、理容青年学校、菓種問屋の青年学校等々種々のものが見られるのである。これらの青年学校は公立青年学校が一般的な商業的教養を与えようとするに對して、夫々独特な職業訓練をめざして居り、従つて同じく商業科といふも公立とはかなり異つた教材をとり入れてゐるのである。従つてこれら青年学校に就ては別箇に考察するを便利とする。

さて商業科の要目に於ては普通科に就ては中小商業の基礎的事項を教材として総合的に排列し、本科に就ても教材は商業といふ一科目で総合され、その排列は商業実務の順序及生徒の理解に應ずる如く考慮されてゐる。唯本科三年、四年に於て複式簿記の教材だけが分離されてゐる。珠算はこの商業とは別にその要領が規定されてゐる。これに従へば大体商業科の形は商業及珠算によつて編成されるのである。

商業科を置く六八校の中私立一三校を除いて公立五五校の中では大体文部省の要目に示された如き学科編成をなしてゐると思はれる

もの二五校である。即ち二五校は文部省の要求する程度の統合教育を行つてゐると見てよい。これらの学校では教科書は使用して居ない。プリント乃至はノートをとる方法を採用してゐる。これは恐らく要目に従つた教科書が作成されていない為と思はれる。唯この形の中で珠算を商業とは別にせず商業中に於て適宜に行ふといふ形のものが見られるが、これは珠算と商業との統合を行つてゐるものとして注目してよいものである。

次に公立青年学校で要目によらないと思はれるものに就て述べよう。要目によらないものは三〇校であるが、これは大体二つの型が見受けられる。その科目の置き方而言ふと一は商事要項、簿記、珠算といふ三科目を各学年に置いてゐるものである。この形のもは調査の中二三校で、一般にも相当に多いと思はれるが、これらの学校では教科書には要目制定前に青年学校教科書として発行されたものか或は商業学校の商事要項の教科書、簿記教科書を使用して居り、一年間の授業総時間数は大體文部省の規定通りである。これは学科編成の上では統合教育の見地があるとは思はれないが、しかしそれは要目に準拠せる教科書のない事も一の理由であると思はれる。商事要項と簿記と珠算によつて簡単な商業常識を与へるのが青年学校の商業科であると考え補習学校以来の伝統的便宜主義以上には出ないものである。これらの学校は教科書が作成されれば恐らくそれに従ふものであつて、中に既に下級の学年で要目に準拠せる教科書を使用して統合せる教育を行つてゐるものもかなり見られるのである。

公立の残りの七校は農業科に於て見た低学年に於て学科の分科的取扱ひをする学校の形と略々型を等しくするものである。これは東京大阪の如き大都市の青年学校には全然見られず中都市に於て見受けられるものである。これはやはりその目標が乙種商業学校程度にある

のであつて、その科目の置き方も商事要項、商業算術、商業英語、商業実践、簿記、商品学、珠算、商業作文等となつてゐる。又その教授時間数も本科低学年に於てかなり多くなつてゐるか、或はこの形を本科二年迄の特別なコースとして置いてゐるかである。

これに就ては農業科の場合に述べた事がそのまま適用されると思はれる。青年学校より高い程度の教育を目ざす時に何故にかく分科的取扱がされねばならぬかは今後の研究問題として残るのである。要目を見ても明かである通りこれらの学校で科目として置かれてゐるものは何れも要目中の何所かの部分に含まれてゐるのである。従つて統合の見地に於てどれだけ高い教育がなされ得るかをこれらの青年学校は今後研究する必要があるのであるまいか。

最後に商業科の編成の仕方に於ける私立青年学校型とも言ふべきものに就て述べよう。十三の私立青年学校を種類別にしてみると、百貨店青年学校、菓種問屋青年学校、理容青年学校、購買組合青年学校、菓子屋の青年学校、青物商組合の青年学校等である。かくの如き青年学校は夫々その職業団体が独特の職業訓練を施さうとして設けたものであつて、その為には単に文部省の要目にのみ従つてゐては教材が不充分であるため、要目以外に特殊な教材を取り入れて来るのである。ここに種々な形の学科編成が見られるのである。先づその科目を見ると、何れの学校も一般的な商事要項、簿記、珠算などがあるが、その外に例へば百貨店青年学校に於て呉服算術、呉服、販売心理、百貨店事務、商品知識等が見られ、菓種問屋に於て薬学、購合組合に於ける産業組合講話、理容青年学校に於ける生理衛生、伝染病、消毒法、理髪法規等である。この科目によつても想像される如く非常に特殊な教材が採用されてゐる。この場合には要目によつて一般的に作成された教科書を使用することは余り好ましくない事は勿論である。従つて教

科書も特殊な科目に関しては夫々の学校で作成されたものを使用してゐる。

所で問題はかかる特殊な教材を含ましめる場合に、それらの教材を別箇に取扱ふことなく統合して教育することは果して行へないものであらうか。これら私立青年学校の学科編成を見ると何れも分科的方法によつてゐる。成程非常に特殊なもの例へば理容青年学校の科目の如きは文部省の要目に合はせて統合することはかなり困難であらう。しかし又例へば百貨店青年学校のその如きは要目に於てもそれに当たる教材が含まれてゐるのである。従つてかくの如きものは要目に合せて教材を統合することもさう難しいとは思はれないのである。

概して私立青年学校の科目は何れも職業の実務に密接に係つてゐて分科的に取扱つてもかなり相互に連絡する所があるのである。故にたとへ要目に合せた教材を統合することは困難にしても、職業の実務を中心として統合することは決して不可能でない。現在の所私立青年学校にはその学科編成の上から見た所ではかかる統合の考え方はないものの如くである。それはしかし要目が出て統合の基本的方針が示されてまだ幾何の時日もなく、又私立青年学校自身も一般に創立日尚浅い状態にあるから無理からぬことも言へよう。しかし今後私立青年学校が、この方向に努力をするならば、日常従事してゐる仕事を中心にかなり具体的な教材の統合が行はれると思はれる。かかる研究が行はれることは文部省が商業実務の順序を考慮して、教材を総合した精神にも合致するのであらうし、それを具体的な生活と結びつけて益々その方向に推進せしめることにもなるであらう。

四、工業科

工業科を置く学校は九九校である。この中公立青年学校三〇校、

私立青年学校六九校である。工業科に於ても商業科の場合と同じく公立と私立はその学科編成の形が非常に異つてゐるから、夫々別箇に論ずることが便宜である。

それにしても一応要目が規準となるから、簡単に要目の方針に触れて置かう。工業科要目に於ては、普通科に在つては一般工業に必要な基礎的事項が総合的に排列されてゐる。本科にあつては部門が単科工業、特定工業、一般工業に分れ、更に単科工業が機械、電気、化学工業、染織、建築、土木、金属加工、木材工芸、特定工業が機械製図、大工、木材工芸、製図、木工、塗装、籐竹工、図案の部門に分けられ、それらの各々について夫々教材が示されてゐる。而して各部門に於ける教材の排列の仕方は何れも同様に総合的である。

かかる要目の要求に対して公立及私立の各青年学校は如何にその学科を編成してゐるであらうか。まづ公立青年学校に就て考察する。三〇校の中二〇校がその学科を一科目として編成してゐる。他の一〇校は何れも数科目の学科を置いてゐるものである。学科の編成だけから見れば前者は統合教育、後者は分科的取扱による教育といへよう。

まづ前者の概況をのべるが、これらの学校に於ける共通の事実は何れも、一般工業部門の要目に従つてゐることである。一般に公立青年学校は一つの学級の中に各種の工業に従事する青年が含まれてゐるから、従つて如何なる工業に従事する者にも必要な基礎的事項を教材としてゐるこの要目に従ふことは当然の結果であらう。又現在の一般公立青年学校の設備では、実習実験等を行ふ事は殆んど不可能に近いからその点からも単科工業、特定工業の諸部門を課程として置く事は出来ないものと思はれる。故にその教授の方法も教科書中心か、講義の形式かで行はれてゐるのである。現在教科書を使用してゐないものが多いが、それはむしろ要目準拠の教科書が出来てゐないことによる

ものと思はれる。それはともかく、これも一応統合教育と言ひ得るであらう。しかしそれは一般工業要目の排列をみても明かな如く実はせいぜい各教材間の連絡に留意したといふ意味での統合と言はれ得るに過ぎないものである。

然らば公立に於て分科的編成を行つてゐる学校の形はどうであらうか。これらの青年学校では何れも工業に関する一般的知識を与へるのではなく、単科工業の中の二、三の部門を夫々課程として置いてゐる。例へば染織科、建築科、機械科と三つのコースを置くといふが如きである。その学科目をみると著しく工業学校的であつて、全然分科して居り、又科目の配当も各学年で夫々異つて居る。その教授時間総数は大体普通の公立青年学校の少くも二、三倍にはなつてゐる。尤も中には普通の規定通りの時間数のものもある。教科書をみても多くは工業学校用のものであつて、全然相互に連絡のないものを使用してゐる。これらの学校は前に農業科で紹介した分科的編成の学校と大体その方針を同じくしてゐると思はれる。即ちその目標が乙種工業学校程度の教育を施すことにあつて、学科の編成も大体それに準ずるといふ方針がとられてゐる。統合教育といふ様な見地は最初からないのである。従つて現在統合教育が行はれてゐないといふわけであつて、そこには統合教育自体に対する問題は提供されてゐない。これらに就ては既に農業科、商業科の所で述べた事がそのまま適用されると思はれるから今これを繰返さない。

私立の工業青年学校はその種類も非常に多く、その学科編成も詳細に見ると実に様々な形態があるが、今はその概況を述べよう。これら六九の私立工業青年学校は何れも工場附設の青年学校である。その大体の種類を見ると、機械工場附設のもの四三校、化学工業一〇校、紡績工業九校、電気工業七校である。しかし機械工場といふも大工場に

於てはその中に化学工業、電気工業を含み、化学工業といふも電気工業を含むといふのが相当あることは注意すべきである。従つてその教材選択の場合にはかなりの苦心を要する。単に要目にのみよることはこの点からも困難である。

この六九校の中工業といふ一科目で総合的な取扱ひをしてゐる学校は僅かに三校のみである。この三校は公立のこの形のものとは全く同じである。工業の種類は化学工業二校、紡績工業一校である。これらの学校は一定の工場に働く青年に対して、一般的な工業知識を授けようとする考へ方に立つてゐるのであつて、かうした工場附設の青年学校がいれば公立的統合教育を行つてゐることは注目すべき事実である。

他の六六校は何れもその学科について分科的編成を行つてゐるが、次に大体機械工場青年学校の形を中心としてその概況を述べよう。他の工業と雖も科目の種類こそ異へ皆その方針は全く同様といつてよい。それらを一々述べることは却つて煩雑となるであらう。機械工場青年学校の学科には製図、機構学（機械の要素）、電気工学、材料学、力学、機械工作法、工業要項、機械工学、専門作業法といふ科目が最も多い。而してこれらは何れの青年学校でも大体置いてゐるのであるが、この他に夫々の工場の目的に応じた様な学科を置いてゐる。例へば光学機械を製造する工場で光学理論を課するといふが如きである。又工業英語、工業数学、物理、化学等を基礎学科的な意味で課してゐる学校も相当に多い。かくの如く工場青年学校は大体に於て科目は非常に細かく分れてゐる。

所でこの科目の各学年に対する排列の仕方はどうかであるか。大体の傾向は学年の進むと共に基礎的なものから専門的なものに異つた科目が配当されてゐる。尤も中に各学年とも大体同様の学科を課すとい

ふ学校もある。この様な科目の置き方は学科の連絡、統合には多少便利であると思はれる。しかし何れにしてもこれら科目の相互の連絡統合といふ事はそれ程問題となつてゐないものの如くである。その教授時間数は大体に於て各学年とも相当に多く二百時間或はそれ以上である。それより少ないのも多少見られる。而してここに注意すべきは時間数が少ない場合は大体に於て科目の数も少く、稀には三科目程度で各学年同じ科目を課している。さうして科目が少ない関係上最初から専門的科目を置くが、その科目の名称がかなり総合的な名称であると思はれる。例へば兵器製作工場で兵器学、工業要項、製図を各学年置くが如きである。

また学科と別途に実習を課してゐる学校が多い。その時間数の多きは年に一千時間以上のももある。少きも四、五百時間は課してゐる。又実習は下級の学年にだけ課すという形が多く、高学年になつて課す場合は時間が非常に少なくなつてゐる。実習が学科の中に入つてゐるというのは要目における排列であるが、さういふ形のものは見られない。いずれの学校も学科と実習とを峻別してゐるものの如くである。

以上がその概況であるが、要するに機械工場の青年学校に於ては教材の総合といふ事はまだそれ程に考えられてゐない。これには種々原因もあるが、一は單純に工業学校の如き形を頭に置いて經營してゐること、又いまだ創立後日尚ほ浅くして教育の経験もなく統合といふ如き事に考へ至らざること、更に又厚生省技能者養成令による学科編成にひきづられてゐること等である。しかしながらこれらの学校の強みは何といつても具体的にその教育目標が与へられて居り、なすべき作業が定まつてゐることである。現在の如く分科的に個々別々な学科が与へられても、實際的には何れも皆仕事を中心として何程か連絡されてゐることは想像に難くない。今一步を進めてもしすべての教材を専

門作業に統合しようとする努力さへあるならば、而して実習を中心とした総合教育が行はれるならば、公立の学校に於けるが如き單純なる教材の連絡といふ如き見地の統合教育とは比較にならぬ程の統合教育がなされるであらう。眞の教材の統合とは決して教材を單純化してまとめることでなく、最も複雑なものも統合し得られねばならぬ。それには統合の爲の強い中心がなければならぬ。この意味でこれら工場青年學校は教材の総合的提出には最も便宜な地位にあるといふべきである。

*

*

*

以上職業科についてその統合教育の現状をみて来たが、要するに青年学校職業科に於ては統合教育はまだ充分問題とされる段階にまで達してゐないといへよう。

形式的に統合を行ふものは相当の数に上つてはゐる。しかしそれはいはば紙上の統合であり、連絡の範圍を出てないものである。これに對して分科的取扱ひをなすものもかなり多いのであるが、これらの学校の中には将来教材の統合に對して有力な問題を提供するものがある。例へば私立青年学校の如きである。教材の統合が單に紙上に於てのみでなく、それらが生きた具體的連関に於て眞に行はれるためには統合の中核ともなるべきものが明確に与へられなければならない。農業青年学校や、商工の私立青年学校には、最も具体的にさういふものが存在してゐる。従つて青年学校職業科は教材の統合が行はれ得る温床であらう。この意味で又青年学校職業科に於ける統合教育は広く統合教育の温床ともなり得るものである。